医療情報処理　24−8
（1979. 3. 10）

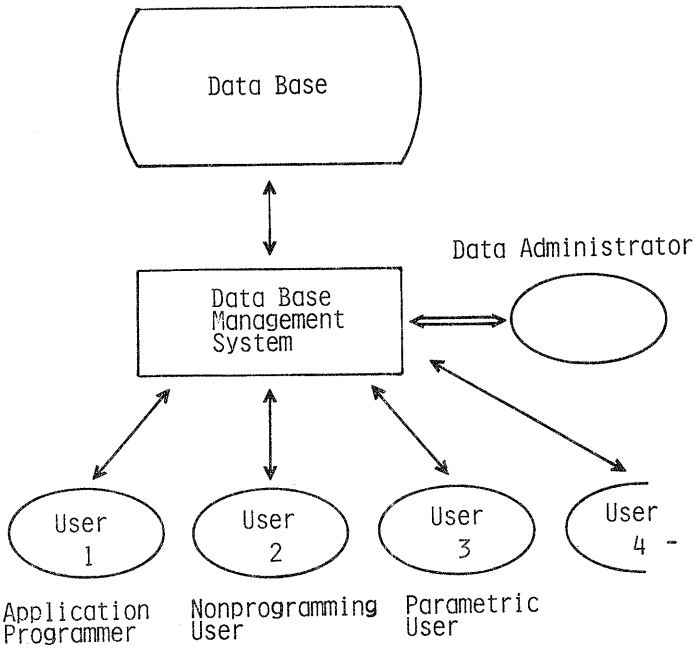
データ活用に関する手法（I）

小池靖夫（近畿大学医学部耳鼻咽喉科学教室）

医学の領域で用いられるデータの種類は多種多様であり，行われる仕事の性質，内容に応じて多種類のファイルが用意され，それぞれ利用されて来たのは周知のところである。しかし，多種類とはいっても，例えば耳鼻科外来患者の診療とか，あるいは或る疾患の治療法の研究というように，特定の目的をめざして作成される複数のファイルの内容は，かなり共通してくるのが当然である。したがって，その共通部分を統合し，いくつもの異った仕事が同じ材料からできるようにしようという考えが生じてくるわけであって，これがデータベースの出発点だということができる。

一般にデータベースは，一定の適用実体（application entity）をあらわすものであるから，それについていろいろな見方をすることが可能である。すなわち，将来それに対してどのような解析が必要になるか分らないから，あるデータ群が特定の1つのプログラムのみに従属するのは不便であり，データの内容をなるべくプログラムから独立させておくことが必要になってくる。そして，図に示したようないろいろな利用者がこのデータベースを利用する場合には，必ずデータ管理システムを経由することにしておけば，応用プログラムに変更があってもデータには影響が及ばないし，データ利用の効率も高くなることは明らかである。

しかし，現実にデータベースとして利用されているもののすべてが，上のような意味で完成されたデータ構造をもっているわけではない。仕事の規模や，性質によってデータベースの性格は多少とも異るし，利用できる電算機の容量から来る制限も，今日ではまだ無視できない。しかし，たとえ構造は不完全な面があっても，データベースとしての役割を現実に果している例が数多くあることは事実である。本節では，耳鼻科関連分野のうちでも電算機利用の進んだ音声言語科学領域での実例をとり上げ，データ活用について考える。



データベースの考え方